

コミュニケーション

赤谷慶子

最近、昔の勤務先の先輩、喉頭癌発見せられ、二度目の手術を受けたりと聞き及ぶ。この手術により、先輩は聲帯を喪失す。さは然りながら、最新の技術により、氣管の操作にて音を發する事可能となれり。彼は週三回發生練習に通ひたるが、「あー」といふ音を發するに難澁するあり。今一人の先輩は舌癌のため、手術を余儀なくせられたるによりて、發聲するに滞りあり、「かきくけこ」の音他人には「たちつてと」または「さしすせそ」に聞こゆ。それがし、その二人の先輩たちと、若き音楽家を應援するシニアの社團法人の理事を務めてあり。九月上旬に協賛企業への説明會あり、その後九月下旬に開催するコンサートの打ち合わせをしたりき。發聲するを得ざる先輩、發音滞る先輩とのコミュニケーションに遺漏あれど、集中し確認念入りにせしかば、何とかしつかりとせし打合わせるを得たり。

しからば、健常の人たちとの會議にてコミュニケーションに支障なしと思ひきや、必ずしもさならず。勘違ひ多く、しかもあまり確認作業せず。同じ日本語を話したるなれば、意思の疎通に万全なりと思ふは危険なり。自分の思ひ込みもあれば、確認せざれば己が意圖の傳わりたりや否やは疑問なり、と近頃思ふこと頻りなり。いはんや、自國語ならぬ言葉にて話す場合は困惑極まりなし。日本の企業も、基本的には公用語を英語としたる會社數社ありたるが、聞くところによると「今日は重要な會議なれば日本語で話すべし」といふケースも多々ありと聞く。自國語にてもコミュニケーション取る事難きを、他の言語を使用したらんには益々勘違ひ多くなり、大切な會議の場合、危険極まりなし。會議録を作りて、やうやくにして確認するを得るならん。

國際會議にては今日同時通譯といふ便利なる手法も存在したれども、しつかり意圖傳はるかというときにあらず。多くの國際會議を見ても、個別に膝をつき合はせて對話するにあらざれば中々容易なることにはあらず。然而意思の疎通はかばかしからざるものあり。人間といふ生き物は厄介にて、頭を眞つ新にして相手の話す事を聞かずばならじ、と思ふに至りぬ。

(平成三十年九月二十五日受附)